

「投薬」と「ポリファーマシー」

東京医療センター
薬剤部長
谷地 豊

「投薬」とは、「疾病に適した薬剤を与えること、投与。（出典：広辞苑）」の意味ですが、「投薬」を「薬を投げる」と読めば随分、乱暴そうに思う方がいらっしゃるかもしれません。しかし、「薬を投(とう)する」と読んだ場合は、さほど失礼な感じはしませんし、むしろ単に「薬を与える」というよりも、「相手の手中に、または先方に収まるように差し出す。（出典：漢字源）」、「治療のために薬を使う」という積極的な姿勢が感じられるようにも思います*。 「投」は相手のことを思い、敬意をはらって行う行為の意味があり、「投薬」とは、病の人に対して、病気や症状に応じて敬意をもって薬を差し出す行為を意味します。「投薬」の語源は諸説ありますが、そのひとつ、お釈迦様の「涅槃図」にまつわるお話をご紹介します。

お釈迦様は、35歳で菩提樹の下で悟りを開いてから45年間、インド各地を行脚して仏法を説き広められました。80歳になって、生まれ故郷へ向かう途中、体調を崩され、病のため沙羅双樹のもとで入滅されました。その模様は涅槃経に記されており、それに基づき、「涅槃図」が描かれています。この図の右上部には、飛雲に乗って天界から我が子の臨終に馳せ参じる仏母摩耶夫人の一行が描かれており、左側の沙羅双樹の枝に一つの薬袋が引っかかっています。この袋は仏母摩耶夫人が、今まさに涅槃に入ろうとしている我が子を救おうと、薬を入れて投じたものとも言われており、母親の深い慈愛や真心が、「投薬」の語源となったとも言われています。

さて、「ポリファーマシー」は、「Poly」+「Pharmacy」で直訳すると多くの薬ということですが、多くの薬を服用することにより副作用などの有害事象を起こすことで、ポリファーマシーが多剤併用ということではなく、多剤併用が悪いことでもありま

せん。今般、厚生労働省の高齢者医薬品適正使用検討会は、薬剤師などの医療者が高齢者の特徴に配慮した薬物療法を行う際の留意事項を「高齢者の医薬品適正使用の指針（総論編）」としてまとめました。ポリファーマシーの概念では、「単に服用する薬剤数が多いことではなく、それに関連して薬物有害事象のリスク増加、服薬過誤、服薬アドヒアランス低下等の問題につながる状態」をポリファーマシーと定義しています。

医師は、患者に対し治療上薬剤を調剤して投与する必要があると認めた場合は、患者等に対して処方せんを交付しなければなりません。医師の処方した薬剤が調剤され患者に投薬される時、薬剤師は必要な情報を提供し、必要な薬学的知見に基づく指導を行わなければなりません。高齢者は、加齢変化、生理機能の低下に伴い、薬物動態と薬力学が変化することや、服薬する薬剤数や服薬回数が多いほど服薬アドヒアランスが低下し、そして、新たな病状が加わる度に新たな医療機関を受診していると薬物有害事象に薬剤で対処し続ける“処方カスケード”と呼ばれる悪循環に陥る可能性があります。

指針の最後には、本指針がポリファーマシーに対する問題意識や高齢者にリスクの高い薬剤、薬物相互作用、服薬薬剤の見直し、適切な服薬支援の必要性や、薬剤の減量や中止により病状が改善する可能性があることを患者等にも理解していただく必要があります。広く国民に薬剤の適正な使用法の知識を普及させることが望まれるとあります。

薬剤師として、「投薬」に込められた意味を心に刻み、「ポリファーマシー」の認識をもち、「患者中心」の医療の実践に心がけて行きたいと思います。

※参考：大学共同利用機関法人人間文化機構国立国語研究所ことばQ&A